復活のリレー走者たち

奨励	早瀬 和人〔はやせ・かずと〕
奨励者紹介	日本キリスト教団能勢口教会牧師

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼〔バプテスマ〕を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

（マタイによる福音書　２８章１６―２０節）

「イースター・リレー」

今年のイースターは一月ほど前の４月２０日でした。皆さんが受講登録を終え、講義が始まって１、２回目のころでしょうか。毎年イースターの日にちは変わりますし、また日本では不幸なことにこの時期は学期始めということもあり、学校ではお祝いしにくいようです。

学生時代、私はこのイースターが大好きでした。教会ではイースターエッグを毎年作りますが、イースターの祝会の後には必ず余るんです。貧乏学生でしたから「早瀬君、持って帰りや」と言われて、７、８個はお持ち帰りできました。それを大事に冷蔵庫に入れて、数週間かけて食べたものでした。ちなみに来年は４月５日。今年以上に慌ただしい時期ですね。

イエス・キリストの復活から約２０００年余が経過しています。復活のイエスに出会った弟子たちは、新しい命を受け、彼らもまた「復活」していくのでした。復活という単語には「立ち上がる」、ヘナヘナと倒れ込む者がもう一度やり直す勇気を与えられて起き上がってゆく。そういう意味が含まれていることを私たちは覚えておく必要があります。

「立ち上がる」ことのできた弟子たちは、復活のイエスから受けた命を「何とかして、何らかの方法」で人びとに伝えようとしました。その彼らの「何らかの方法」のおかげで、２０００年後を生きている私たちもキリストの復活の命を受けることができているのです。

この弟子たちの「何らかの方法」とは、何だったのか。何も特別な方法ではありませんでした。次から次へとバトンタッチしていく「リレー」だったのです。このリレーには、復活のイエスに出会った者なら、時代を越え場所を越え、誰でもが参加可能です。実際にキリスト教会は、このリレーによって「今」があると言えましょう。

谷川俊太郎作「朝のリレー」

ところで、「リレー」という言葉を聞いてどんな印象をもちますか。私自身は、走るのが得意でなかったのでリレーと聞いてもあまりいいイメージをもっていませんでした。ところが、谷川俊太郎さんの「朝のリレー」という詩を知った途端にリレーって生命を生かす素晴らしい言葉だ。と感じるようになりました。

「朝のリレー」
カムチャッカの若者が
きりんの夢を見ているとき
メキシコの娘は
朝もやの中でバスを待っている
ニューヨークの少女が
ほほえみながら寝がえりをうつとき
ローマの少年は
柱頭を染める朝陽にウインクする
この地球では
いつもどこかで朝がはじまっている

ぼくらは朝をリレーするのだ
経度から経度へと
そうしていわば交替で地球を守る
眠る前のひととき耳をすますと
どこか遠くで目覚時計のベルが鳴ってる
それはあなたの送った朝を
誰かがしっかりと受けとめた証拠なのだ

（谷川俊太郎『谷川俊太郎詩選集１』集英社　２００５年）

眠る前に耳を澄ましてみる。するとどこからか目覚時計が鳴り響く。それは私たちが過ごした今日の朝を、どこか別の国の誰かがしっかりと受け取って、また新しい朝を過ごし始める。そうやって次から次へと朝はリレーされていく。ここにこそ、地球上で途切れることなく営まれている朝という平和な時を、人類みんなで交替で守っている、という内容の詩として受け止めることができるではありませんか。

そこで何を思ったのか、私はこの詩の朝という字を「復活」という言葉に置き換えて読んでみました。するとどうでしょう。一味違った意味が聞こえてくるんです。

ぼくらは「復活」をリレーするのだ
経度から経度へと
そうしていわば交替で地球を守る
眠る前のひととき耳をすますと
どこか遠くで目覚時計のベルが鳴ってる
それはあなたの送った「復活」を
誰かがしっかりと受けとめた証拠なのだ

こんな感じです。

私たちが今、復活のキリストのことを伝えられ知ることができているのも、まさに「復活のリレー」が展開されていて、そのバトンを次々に受けとってきたからなのです。すでに眠りについたたくさんのキリスト者が、証しし続けておられたからなのです。

疑う者もいた

さて、読んでいただいたマタイによる福音書には、はっきり書かれています。

弟子たちは「イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」と（２８章１７節より）。これが復活のイエスと出会った直後の弟子たちの様子だったことが分かります。

イエスはそんな弟子たちを、あえて宣教の業に派遣されます。「洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（２８章１９～２０節より）と言いながら。つまり、イエスの弟子たちは、疑うことのない完璧な信仰をもった立派な人たちばかりではなく、疑いと失敗の可能性を未だもち合わせたままの連中だった、ということが分かるではありませんか。

どうでしょうか。弟子集団とは「疑う者もいた」という集団であったという聖書箇所を読むとき、私たちの価値観は崩されませんか。キリストの弟子とは、こうあるべきだ。クリスチャンとは、こうあるべきだ。それなのに疑っているようじゃダメじゃないか。といった固定観念や、ある種の枠組みが崩されていく。もしそういう固定観念をもっているとしたら、それは崩されるべきであり、そうして新しい枠組み、すなわち、人間的な判断を超えたところにある「神の選びの枠組み」に目を向けるべきだと思うのです。

「リレー走者」の一人に選ばれる

キリストの福音を宣べ伝えるということは、完璧な人間がすることなんかじゃない。たとえ疑い深くあったとしても、たとえ不完全で未熟な信仰であったとしても、「ただキリストのみを見つめ、キリストのみに賭けようじゃないか」とキリストを見つめ、神の選びに目を向ける。そうすることによってなされてきた業なのだ、と今日の聖書を読むことによって気づかされています。

今語った「神の選び」とは、なにもキリスト教を宣べ伝えるために働く聖職者だけに限った特別な選びのことではありません。キリストからの命、復活の命に生きようとする者、誰

もがこの命を受け、そして伝えるために選ばれているのです。
　神からの「命」を分けていただき、「『復活の命』という、もう一度やり直す勇気が与えられるのって、いい感じだよね」と思ってしまった人間が、次から次へとその命のことを語り伝えてきました。そして、さらにこのリレーは続くのです。
　ここ同志社に選ばれて学んでおられる皆さん、ぜひこのことを喜んでほしいのです。そしてそこに、イエス・キリストと出会えたことを増し加えながら「復活のリレー走者」となってほしい、そう願っています。

２０１４年5月２８日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録